2 玉川上水の分水

○分水の効果

玉川上水は羽村からいくつかの段丘を経て、武蔵野台地のりょう線部を流れ、四谷大木戸まで到達する自然流下方式の導水路です。

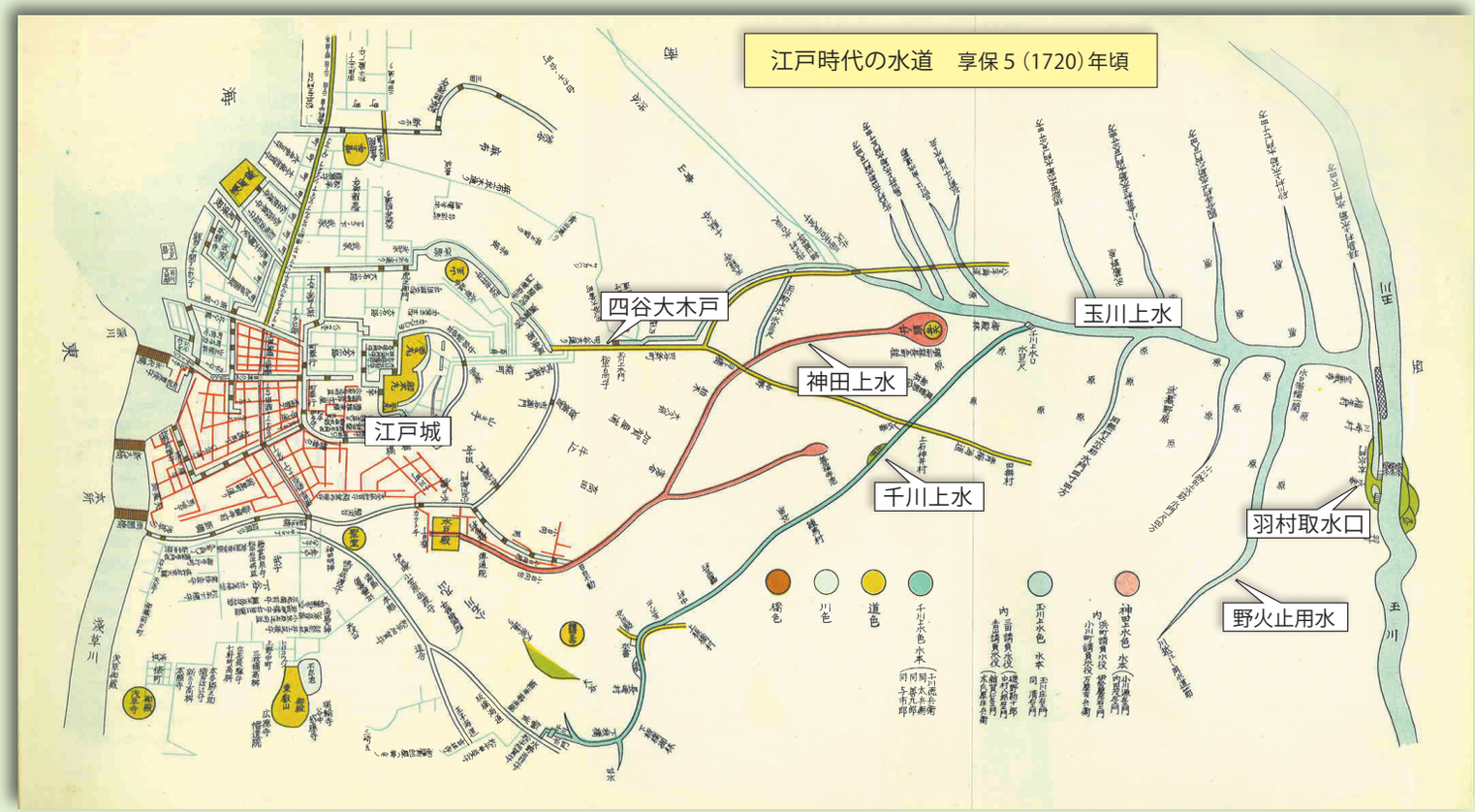
武蔵野台地のりょう線部を流れているため、台地の各部に分水することが可能となり、多くの分水が引かれました。分水は、飲料水、かんがい用水及び水車の動力として利用され、水の乏しい武蔵野台地の開発に大きく貢献しました。

○主な分水

玉川上水開削工事の総奉行であった川越城主松平信綱がその功績を認められ、明暦元（１６５５）年、野火止用水に最初に分水されました。寛文７（１６６７）年には、水量の少ない神田上水にも助水されました。

青山、三田、千川の３上水も明暦の大火後拡大した江戸の水需要を支えるため、分水されました。

「上水記」によると、寛政３（１７９１）年頃には、３３分水が記録されています。



●出典：東京市史稿　上水篇　第一
東京都公文書館　所蔵